人は楽しむために生まれてきた

日本国民への提言 ㊾

たまごビル院長　石垣　邦彦

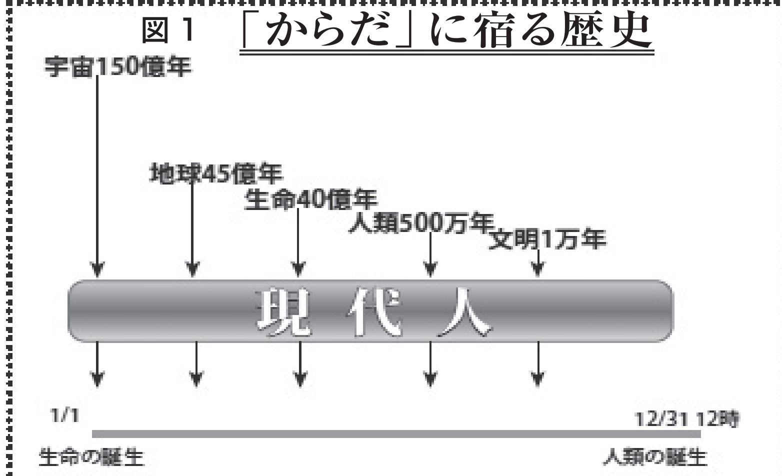
〒581-0061
大阪府八尾市春日町1-4-4
電話072（991）3398
FAX072（991）4498
ホームページアドレス
http://www.tamagobl.com/

たまご理論で病気のしくみを考える

日本の国民一人ひとりが、自らの「からだ」の「しくみ」を生かすことで日本を再生する

人類よ、めざめよ

図１　「からだ」に宿る歴史



5月号では【「からだ」の外と内との関係からみる人類の活動傾向とスッポリ抜け落ちていること】と題し、現代人の健康・病気への対応の傾向を分析した。

慢性疾患には「からだ」の外から物を入れて、「からだ」をよくしようとする傾向があり、感染症（インフルエンザや新型コロナウイルスなど）には「からだ」の内には入れないで予防し、入ってきてもやっつけようとする傾向があること。

また、マスコミ報道そのものが新型コロナウイルスの感染者数・死者数に偏り、当事者である我々人類の「からだ」の状態には、一切触れていないことを指摘した。

【人類とウイルスの自然経過を診る】ことによって人類とウイルスの相互関係を考察した。

感染するのも発病してからの症状の程度も、人類とウイルスの力関係の中でおこること。

人類の「からだ」が強ければ＝「上腹部がやわらかい」状態であればウイルスに感染しない。発病しない。軽症ですむ。無症状で終わる。人類の「からだ」が弱ければ＝「上腹部がかたい」状態であれば重症化する。死に至る。ウイルスと人類の「からだ」の間には、明らかな相関関係があることを指摘した。

【重症化させないことを深める】

現在、重症化と死亡を防ぐ治療薬（注1）・ワクチンがない。その中でどう対応するかが問われていること。

幸い8割が軽症であり、重症化するのは、基本的に高齢者・基礎疾患のある方なので、感染者を少なくすると同時に重症化を防ぐことが大事であることを述べ、重症化を防ぐ新たな視点と方法を提案した。

①新型コロナウイルスと人類との自然経過・関係を活用する

新型コロナウイルスの出現＝飛散↓感染↓発病↓症状の出現となる。人類の「からだ」の状態によって症状も、無症状・軽症・重症・死にいたるところとなる。無症状・軽症の場合であれば抗体ができ最善の方法である。抗体ができれば基本的に同じウイルスにかからなくなるからだ。そのため、新型コロナウイルスとのベストの関係は8割が無症状・軽症であるため、日常生活を営む上で自然に感染し抗体をつくることである。ウイルスとの共存でもある。

緊急提言一新型コロナウイルスの諸問題を一挙に解決する

①感染した軽症者は働く・高齢者と基礎疾患のある人は隔離する
②全人類が、「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらく」状態を保持する

図2

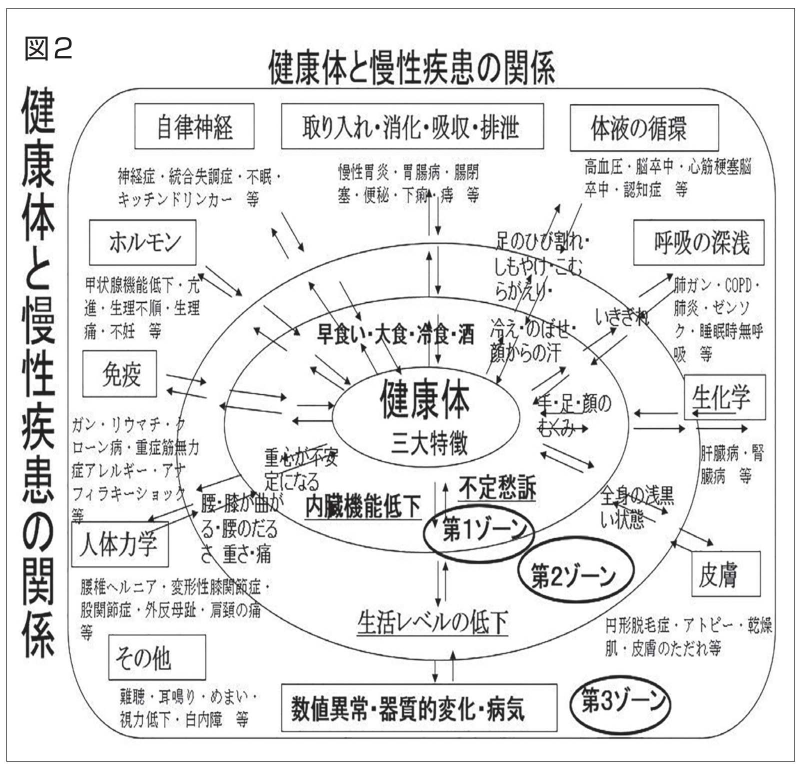
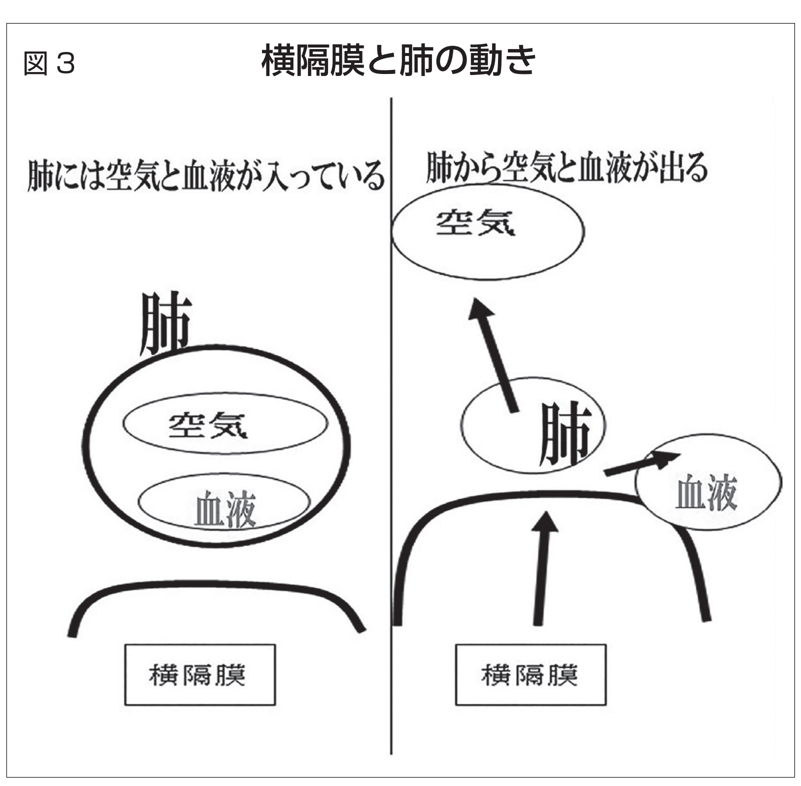


図3



新型コロナウイルスより怖いのは ゼロリスクを求める人類だ③
コロナショックをコロナチャンスに変えよう

報道されているような感染＝悪ではない。当然、同時に重症化と死を防ぐ対策が必要である。

②人類の「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらく」状態＝「上腹部がやわらかい」状態＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」の良い状態＝総合的免疫力がある状態の活用

人類は、今日に至るまで「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらかない」状態が続いた結果としての病気に対し部分的に診断・治療をおこなってきた（図2）。しかし、これでは現在必要とされている予防ができず、慢性疾患・感染症に対する治療も非常にこころもとないのが現状だ。

発想を変える必要がある。

わたしは、長年の臨床研究の中から、「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらく」状態＝「上腹部がやわらかい」状態＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」の良い状態＝総合的免疫力が「はたらく」状態（表1）に相関関係があることを発見した。

発想を変えるということは非常にむつかしいことであるが、パラダイムシフト（劇的な変革）が今後の人類にとって必要である。

その意味でこの事実を大阪万博の基本理念として取り入れ、大阪万博を通して全人類に普及することが必要である。

※重症化しやすい方は、基本的に高齢者・基礎疾患のある方＝「からだ」が弱い方である。高齢者・基礎疾患のある方に共通することは「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらかない」状態である＝「上腹部がかたい」状態である＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」が悪い状態である＝総合的免疫力が低下している状態である。

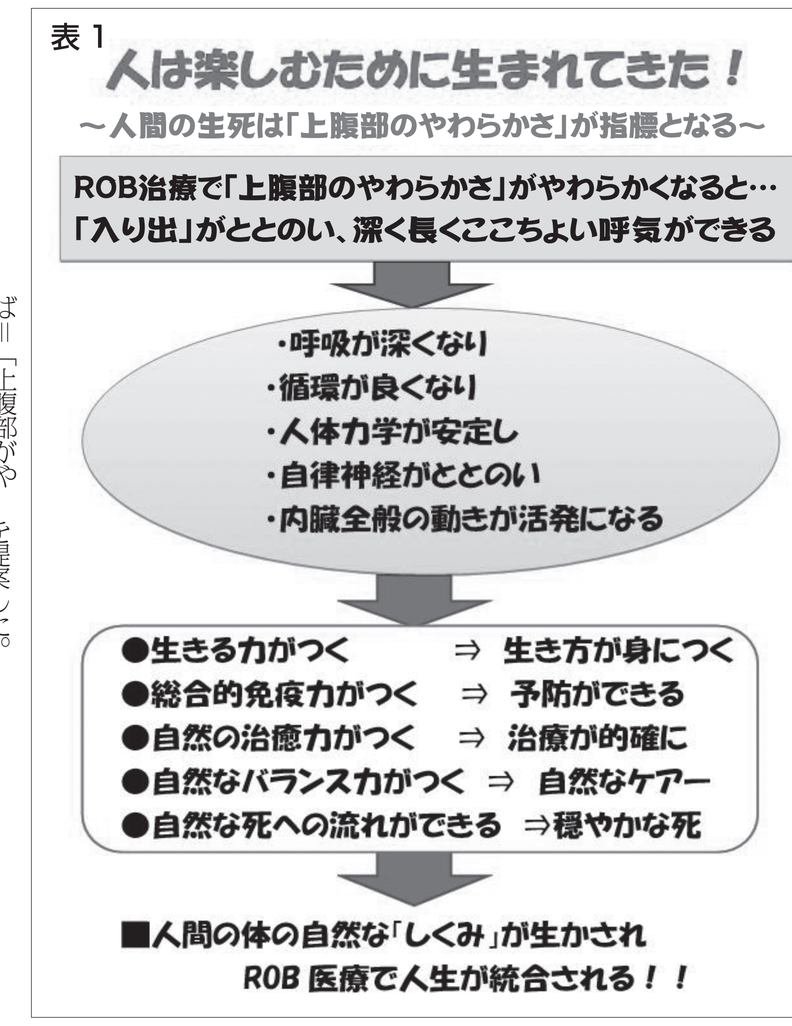
例えば、志村けんさん―たばこ30本・大量飲酒・平成16年肺炎で入院・高齢などによる肺そのものの代謝機能低下状態

例えば、岡江久美子さん―乳がん手術・2月まで抗がん剤治療・放射線治療による肺そのものの代謝機能低下状態―これだけそろえば、二人とも「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらかない」状態＝「上腹部がかたい」状態＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」が悪い状態＝総合的免疫力が低下している状態であることは明らかである。

マスコミで話題になったこの二人の例からも分かるように、「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらかない」状態＝「上腹部がかたい」状態＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」が悪い状態＝総合的免疫力が低下している状態であるために必然的に重症化し死に至ったことが理解できる。

長年の臨床研究の結果、「からだ」が強い状態＝「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらく」状態＝「上腹部がやわらかい」状態＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」の良い状態＝総合的免疫力が「はたらく」状態があることを発見した（表1）。この「からだ」の「しくみ」を高齢者や基礎疾患のある方に適用し、重症化の予防として生かすことを全人類に提案する。

表1



大阪万博に基本理念を提案する ⑪

③新型コロナウイルスの特徴、特に熱に弱いという特徴の活用

これは、「薬のチェック」HPを見ていただければよく分かることだ。

特に、速報版№183～187を参考にしていただきたい。

とりわけその中でも、新型コロナウイルスの特徴＝熱に弱いという性質を活用する必要がある。解熱剤で熱を下げてしまうとウイルスにとってよい環境ができてしまう。そのため、ウイルスが増殖し、人類にとっては重症化の大きな原因になってしまう。ここに大きな落とし穴がある。

逆に解熱剤を使わなければ重症化を防ぐことにつながる。ここに大きな重症化を防ぐ手立てがある。その他、重症化の原因になるクスリが多くあるので、ぜひとも「薬のチェック」で確認していただきたい。

以上、4月号と5月号で新型コロナウイルスに対する抜本的な考え方を提案した。

この三つの視点は、マスコミにも、医療界にもほとんどないものなので敢えて提案した。医療の改革のみならず、人類の生き方をも変えてゆく必要があるからだ。

今回は新型コロナウイルスについて、さらに深めた提案をする。

【隔離するのは、高齢者・基礎疾患のある方＝「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらかない」方＝「上腹部がかたい」方＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」が悪い方＝総合的免疫力が低下している方】

隔離するのは感染した無症状者・軽症者ではなく、感染していない高齢者・基礎疾患のある方＝「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらかない」方＝「上腹部がかたい」方＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」が悪い方＝総合的免疫力が低下している方こそ必要である。

これらの人々こそ、隔離あるいは隔離に近い状態で生活をする必要がある。

特に高齢者は、「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらく」状態＝「上腹部がやわらかい」状態＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」の良い状態＝総合的免疫力が「はたらく」状態に維持することが必要である。

また、高齢者への投薬は極力減らすことが大事である。

【新型コロナウイルスによる肺炎を予防する】

新型コロナウイルスによる肺炎が重症化し死に至ることがある。志村けんさん・岡江久美子さんもそうだ。

志村さんはたばこの吸いすぎ・大量飲酒による肺の機能低下によるもので、岡江さんは乳がん手術・抗がん剤・放射線療法による肺の機能低下が直接の原因である。

二人とも肺の「はたらき」が弱っていたところに新型コロナウイルスに感染して肺炎を発病し重症化したものである。二人とも重症化する要因を持っているのだから隔離する必要があった。感染を防ぐ予防的隔離が必要であった。

長年の臨床的観察から分かっている事実は肺の機能低下がある場合、「上腹部がかたい」状態である。そのため、上腹部の診断をしていれば、新型コロナウイルスによる肺炎と死を防ぐことができることになる。

「上腹部がかたい」状態であれば、ROB治療（内臓調整）で＝「からだ」の「しくみ」がスムーズに「はたらく」状態＝「上腹部がやわらかい」状態＝「呼吸・循環・自律神経・人体力学・内臓全般の動き」の良い状態＝総合的免疫力が「はたらく」状態に戻してやることができる。つまりコロナウイルスによる肺炎を予防でき死を防ぐことができるのである。

【基礎疾患＝生活習慣病と肺の「はたらき」と上腹部の関係から重症化を防ぐ】

京都大学大学院医学研究科・医学部呼吸管理睡眠制御学陳和夫特定教授の調査で、「やせていて眠気を感じない人でも、生活習慣病があれば睡眠時無呼吸のリスクがあり、注意が必要だ」と報告されている。

糖尿病・高血圧・心臓病などの生活習慣病のある人＝基礎疾患のある人は睡眠時無呼吸になりやすいということだ。睡眠時無呼吸の方は、臨床的には太っていても、やせていても「上腹部がかたい」状態の人である。「上腹部がかたい」状態の人は横隔膜の上下の移動幅が狭くなるために、呼吸と循環が浅くなる。そのために睡眠時無呼吸となりやすい。

要するに、基礎疾患のある人は呼吸が浅く睡眠時無呼吸になりやすいということだ。

つまり、新型コロナウイルスに感染し、重症化しやすい高齢者・基礎疾患のある方は、呼吸が浅く肺そのものの代謝がもともと悪くなっているために新型コロナウイルスによって重症化しやすいのである。

ROB治療（内臓調整）により「上腹部がやわらかい」状態をつくり、横隔膜の上下動の可動範囲を大きくし肺そのものの動きをよくしてやれば重症化による肺炎とその死を防げることになる（図3・注2）。

注1　薬のチェック　速報版186・187参照

注2　高齢者と肺炎の予防を「上腹部のやわらかさ」から診た実例は、本紙2008年（平成20年）
4月号―慢性疾患の診断と治療にはその方の人生を知る必要がある
5月号―老人の死に至る肺炎は予防できる
6月号―高齢者の肺炎予防のポイントは静脈還流にある
7月号―高齢者の肺炎死の原因は体全体の機能低下状態にあり強力な抗生物質も効果が少ない
8月号―高齢者の体全体の機能を低下さす薬の副作用、これをどう解決するか
本紙2014年（平成26年）
7月号
DIPEx・NBM・EBM、そしてARTを「上腹部の柔軟性」で串刺しにする中島治子さんの同時進行ドキュメント
8月号
Ⅰ中島治子さん（当時85歳）の4月の肺炎
Ⅱ中島治子さんの肺炎の予防
2014年（平成26年）については「たまごビル」HPでご覧いただけます。